

## 「遠賀川式土器と弥生文化の広がり」 解説パンフレット

令和6年12月10日(火)～令和7年3月16日(日)

九州歴史資料館 第2展示室

弥生文化が日本各地に広まっていく様相を示すものとして、「遠賀川式土器」があります。今回の展示では、遠賀川式土器や初期の弥生文化の特徴を示す代表的な資料を紹介いたします。

### I 遠賀川式土器とは

日本の歴史の中で、水稲耕作を基礎とする弥生文化の成立は大きな画期です。弥生文化はいち早く九州北部で成立し、急速に西日本一帯に広がっていきますが、その文化内容は広範囲にわたりかなり似通っています。弥生文化の初期の広がりを象徴するのが「遠賀川式土器」であり、歴史の参考書や考古学の概説書等にもその重要性が示されています。

「遠賀川式土器」の「遠賀川」は福岡県東部を流れる河川のことです。考古学の世界ではその学史が故に全国的に羨望の眼差しが向けられています。



行橋市 辻垣ヲサマル遺跡出土土器

### II 遠賀川式土器命名のいきさつ

遠賀川はかつて暴れ川であり、川のそばにあった多くの遺跡を氾濫時に壊してしまうこともありました。住居跡などの遺構は氾濫によってなくなったものが多いのですが、土器や石器は残ったため、今も河川敷や川床には土器や石器が出土する多くの遺跡が眠っています。

これらの遺跡の中で、福岡県水巻町の立屋敷遺跡<sup>たてやしき</sup>では、羽状文等の文様を持った特徴的な土器が出土することが知られていましたが、これと非常によく似たものが近畿地方にも存在することが分かり、西日本一帯に広がっていることが明らかになっていきました。

口縁部の下に段がある壺形土器や、外反する甕形土器を特徴とする土器は各地で見られることから、弥生文化が急速に西日本一帯に広まったことを示すものとして注目されました。その重要性から、遠賀川の名前をとり「遠賀川式土器」と命名され、現在も西日本の弥生時代前期の土器の総称として使用されています。

1940年には、立屋敷遺跡の本格的な発掘調査が行われ、その成果は報告書『遠賀川』にまとめられました。弥生土器研究にとって遠賀川は、聖地と呼べる場所なのです。

### III 遠賀川式土器以前の土器

遠賀川式土器(弥生土器)のルーツを考える際、その製作方法に着目すると興味深いことが分かります。それは粘土の接合方法で、遠賀川式土器は接合面が外側に傾くものに対して(外傾接合)、縄文土器は内側に傾く点です(内傾接合)。そしてこの外傾接合で作られた土器は、朝鮮半島の土器によく見られます。このことから、遠賀川式土器の作り方は、朝鮮半島の土器製作技術に求められます。

外傾接合で作られた朝鮮半島系の土器や壺形土器は、九州北部では刻目突帯文土器<sup>きざみめとつたいもん</sup>という最後の縄文土器が作られた時代に出現します。この時代は「弥生時代早期」と呼ばれています。

朝鮮半島系の土器はその後に九州北部で量を増やし、在地化することで、遠賀川式土器の直接の祖先となる「板付I式」が生まれます。

#### IV 初期の遠賀川式土器

遠賀川式土器でも初期のものは、直線的な口縁部の下に段を持つ壺形土器、そして短く外反する甕形土器が特徴的です。壺形土器は貯蔵用、甕形土器は煮炊き用（炊飯用）で、縄文土器とは異なり、壺形土器が多く占める点が特徴的です。これは米づくりが行われるようになったことが関係しており、朝鮮半島の同時期の器種構成とよく似ています。

ただ、朝鮮半島の土器にはない壺形土器の文様は、縄文文化によく見られたことから、縄文文化の要素を合わせ持っていると言えます。同時期に見られる、口縁部外側に突帯を持つ甕形土器も、元々は刻目突帯文土器の要素と考えられます。一見、縄文土器に見えますが、作り方は遠賀川式土器と同じです。

中・四国地方に出現する初期遠賀川式土器に最も類似するのが豊前地域の土器のため、豊前地域から各地に遠賀川式土器が広まっていったことがうかがえます。

#### V 遠賀川式土器に伴う文化要素

遠賀川式土器に伴う石器としては、稲穂を収穫するのに用いる石包丁、木製農具等の加工に用いる柱状片刃石斧などがあり、これらは朝鮮半島から稲作と共に伝わったものです。ほかにも糸を紡ぐ時に用いる紡錘車や、大きな溝で集落を囲む環濠集落、また墓に壺形土器や磨製石剣を副葬する習俗も朝鮮半島から伝わったもので、これら文化要素は、弥生時代前期に遠賀川式土器と共に広く西日本一帯に見られるようになります。

弥生時代には稲作が伝わりますが、単に新しい生業が導入されるに留まらず、稲作を行う上で必要な道具や文化がセットとしてもたらされ、そして広がっていったと言えます。遠賀川式土器が初期弥生文化の象徴とされる所以がここにあります。

#### VI 遠賀川式土器と弥生文化の広がり

遠賀川式土器は、豊前地域で板付I式から少し変容し、そこから各地に広がったようです。その分布圏は名古屋から敦賀を結ぶ線より西側で、それより東側は遠賀川式土器とはまた違った土器が多く存在します。

そのような中、点的ではあるものの、東北地方等では遠賀川式土器の特徴を持った土器が少量ながら出土する遺跡が存在します。遠くは青森県にも見られ、稲作を伴った初期弥生文化の影響が、弥生時代前期のうちに東北地方北部まで及んだことを示しており、注目されます。

遠賀川式土器の特徴を持った東北地方の土器を細かく見ると、接合方法が縄文時代的な内傾接合で、形も西日本のものとはやや異なっており、直接西日本の人々が関与したものではなさそうです。これらは近年「類遠賀川系土器」と呼ばれ、西日本で弥生文化を学んだ東北地方の人々が、地元に戻って製作した土器との説も出されています。

